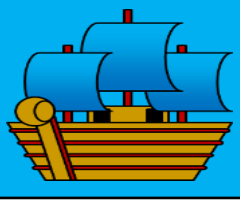
令和５年度　つかわき便り　　令和５年７月１日発行

ゆうらくせん 遊楽船７月号



施設長　福永政和

毎朝、猫たちが職場の玄関付近で迎えてくれます。まるで、主（あるじ）を待っているかのように…。弟の可愛がっていた猫たちです。

つかわきの同僚でもある、弟 福永伸二は６月４日（日）夕方、保護猫の活動中に突然倒れ、帰らぬ人となってしまいました。つかわきに 22 年間の勤務、相談支援専門員として利用者の皆さんや職員からも頼られる存在でした。57 歳の生涯、突然で早すぎる別れは未だに信じがたく無念でなりません。私にとって弟の存在は、進言したり苦言を呈してくれたりと一番のバディ、最高の相棒でもありました。

弟は福永家の次男として生まれ、高校時代はラグビー選手として活躍、体も声も大きく、優しく大らかな性格でした。少々のことではびくともしないとの自負が、いつの間にか心臓が病魔に襲われ、そこまで危ない状況であるとは知るよしも無かったのでしょう。若い頃は元気すぎて親に迷惑をかけることも多々、決して順風満帆とは言えませんが、生き様は豪快そのものでした。同じ職場で共に笑い、共に苦労しながら過ごした時間はとても幸せでした。

また、弟は長年、保護猫の活動も懸命にやっておりました。捨て猫を拾っては大切に可愛がり、怪我した猫への手術を施してあげたり、保護活動する仲間たちの相談にも乗ったりするなど、頼られていたようです。常々、動物の力によるセラピー（癒し）で利用者を幸せにしたいとの理想も掲げていました。実に欲のない性分で、「定年まで頑張ったら、もっと猫の世話を楽しみたい・・」と言うほど猫が大好きでした。こうした保護猫の活動は、弟にとっては福祉の原点とも言えたのではないかと改めて感じます。「困って入る人へ愛を差し伸べる、困っている猫、捨てられた猫までも愛を差し伸べる…」彼の魅力です。また、口癖のように「利用者あっての施設、利用者のために」と言っておりました。「親父の建てた学園だからこそ大事にしたい、これからも守りたい」との一心で生きてきました。志半ば、悔しさが残りますが、「本当にお疲れ様、ありがとう」とこれまでの頑張りを讃えたいと思います。

「母親より先に逝くなんて…」「まだまだ、やりたいことがいっぱいあっただろうに…」なかなか現実を受け止められないのも正直な気持ちです。しかし、私たちは彼の志を引き継ぎ、また、前へ進まなければなりません。７月の旅行の中止も考えましたが、そんなことを伸二が望むはずもありません。利用者の皆さんの喜ぶことを、利用者の皆さんの笑顔のために邁進することが供養にもなるはずです。

天国で迎えた親父から「なんでこんなに早く来たか。まだまだしないといけないことがあっただろ！」と怒鳴られてる様子が浮かびます。今は親子水入らずで笑いながら見守ってくれているのでは。私たちは彼の口癖を思い出しながら、つかわきの皆さんの幸せのために前へ前へと進みたいと思います。

結びになりますが、役員や家族会長、保護猫の仲間の皆さんはじめ、これまでお世話になった方々、多くの利用者の皆さんもお通夜と告別式にご参列いただきました。また、家族会からはお花やご香典もいただきました。心から御礼申し上げます。本当に伸二がお世話になりました。暑い夏を迎えます。くれぐれも御自愛ください。

ありがとう伸二さん。安らかに。

伸二さんのお通夜、告別式が鹿児島市の斎場で営まれ、多くの利用者の皆さんと一緒に参列し、お見送りいたしました。

６月５日（月）のお通夜の前に一時間ほど、伸二さんとのお別れの時間を特別にいただきました。迎えてくださったお母様へかけ寄り、「みちこ先生・・」と涙しながら抱き合う姿、「何でこんなことに」「伸二さん、これまでほんとにありがとう」「これまで言うこと聞かずにごめんなさい」などと涙ながらに語りかける姿がありました。

施設長からは感謝の言葉と共に、きっと伸二さんが皆さんに伝えたかったこととして話されました。「みなさんと楽しい時間を過ごせたこと、本当にありがとう。これからも、つかわきでみんな仲良く暮らすんだよ。そして、幸せな時間をいっぱいつくるんだよ。」

職場では、伸二さんの豪快な笑いがもう聞けなくなってしまいました。私たち職員にとりましても、本当につらくこれほど寂しいことはありません。彼の存在の大きさにあらためて気づかされます。今はただただご冥福をお祈りするしかありません。私たちは、伸二さんやご家族の皆様のためにも彼の思いを引き継ぎ、利用者の皆さんのためにしっかり頑張っていきたいと思います。

安らかにお眠りください。ご冥福を心よりお祈り致します。

田植えに精を出しました

６月 13 日・14 日、深い悲しみの中ではありましたが、季節は待ってくれません。元気を出して今年も田植えをしました。

今年もたいよう班と陶芸班の利用者の皆さんが頑張ってくれました。「美味しいお米を作って、伸二さんへもお供えしないとね」と声かけしながら汗を流しました。きっと見守ってくれていると思います。